

資料紹介

りょうがえてんびん はりぐちてんびん 両替天秤 (針口天秤)

枚方市教育委員会所蔵の天秤秤(民具番号0-1922)。江戸時代に使われていた伝統的な質量計測具には、「竿秤」「天秤秤」の二種があります。このうち、「天秤秤」は中央の支点から等距離に腕が伸び、両端に重さを量りたい物と分銅を吊るし、吊り合いを見て計量する形式の秤を示します。天秤のなかでも、中央の支点部分に「針口」と称する指針がついているものを「針口天秤」、さらに、今回紹介するような、台付の大型天秤を「両替天秤」と呼びます。

江戸時代は幕府によって三貨制度が定められ、金貨・銀貨・銭貨(銅貨)の三種類の異なる体系の貨幣が並立して使われました。そのため、貨幣の交換には相場に基づいた両替が必要となり、手数料をとって両替をする両替商という商売が成り立ちました。三貨のうち、関西で本位貨幣とされていた銀貨(丁銀・豆板銀)のみが重量によって価値が決まる秤量貨幣であったため、両替はもちろぬ、一般市場の売買においても都度の計量を要しました。小口の場合は携帯に便利な小型の棹秤「瓢箪秤(銀秤)」が使われましたが、大口取引の場合は両替天秤が使われたため、大きな商家の帳場にも置かれていました。両替商にとっては必須の商売道具だったことから、両替天秤と呼ばれるようになったのです。

枚方市が所蔵する両替天秤は、田口の旧家から寄贈を受けたもので、現在市が所蔵する唯一の両替天秤です。棹中央の支点到針口が設けられ、計量する時は、ここを付属の小槌で叩いて微調整します。棹の両端に吊るされた天秤皿には「極印」が打たれており、「極 中堀甚九郎(花押)」と読めます。秤の精度は経済活動に直接関係するため、その製作や販売には厳しい統制がかけられていました。秤の製作販売は、幕府から認可された「秤座」が独占し、古秤の補修検定の一切も支配しました。天秤皿に銘のあった中堀とは、江戸の秤座守随家の配下にあった秤(針口・棹・皿)細工職人の家です。各地に現存する両替天秤の大半に中堀の極印が打たれており、甚九郎のほかにも、与十郎、吉兵衛、林十郎、善太郎、与一郎などの名が知られています。

中堀家の系譜はよくわかっていませんが、姓ではなく、天秤製作の権利と結びついた職人銘(工房銘)である可能性が高いのではないかと思います。というのも、江戸時代の出版物『京羽二重』(宝永2年(1705)刊)や『人倫訓蒙図彙』(元禄7年(1694)刊)を見ると、京都の両替町姉小路下ル町ほか商業中心地の現下京・中京・上京区の数ヶ所に与三郎、与一郎、与十郎、与三左衛門、与三兵衛、長兵衛などの針口師(針口天秤の細工職人)がいたこと記されています。すべての針口師が「堺」姓を名乗っていますが、中堀銘の天秤を作っていた工房とみて差し支えないでしょう。なお、天秤は大坂の堺産のものが上質とされたようですが、『雍州府史』(貞享元年(1684)刊)には泉南の針口屋の余流が京都にあると記されており、京都の針口師が「堺」姓を名乗っていることと無関係ではないと思われます。

さて、秤同様に計量の公正を左右する分銅も、厳しい統制下に置かれ、彫金細工師の後藤家が世襲的に統括しました。枚方市所蔵の両替天秤に付属する分銅にも、「後藤」の文字と、後藤家の花押、後藤家家紋の五三の桐紋が刻印されています。分銅は通常、18個、もしくは19個の揃い組となっていますが、この天秤には14個しか残されていません。内訳は「貳拾両」×2個、「伍両」×3個、「壹両」×2個、「五匁」「四匁」「参匁」「二匁」「五分」「四分」「二分」となっており、5両・30両・10両・4両・3両・2両・1匁・3分・1分が紛失しています。5両などは3個もあり、複数の組分銅が混ざっているようです。朱がつけられた分銅があるのは、別の組の分銅が混ざった場合に区別するためだと考えられます。

両替天秤は、収納にも工夫が凝らされており、台の引き出しに、皿・棹・秤架(鳥居)をはずしてしまえるようになっています。使わない時には小型の箆筩になり、側面につけられた金環を握って持ち運べるようになっています。この両替天秤の旧所蔵者は、江戸時代の田口村において庄屋役を勤めた大きな農家であり、幕末には金融業も営んでいました。そのため、一般農家にはない、このような両替天秤を所持していたものと思われる。枚方宿のものは残されていませんが、水陸交通の要衝として発展し、商家の多かった同地でも、このような両替天秤が活躍したことでしょう。



『人倫訓蒙図彙』

元禄3年(1690)刊

平凡社「東洋文庫」に収録

左:「両替や」(天秤を使う両替商)

右:「天秤」(天秤を製作する職人)



▲ 針口
計量結果を左右する重要な部分



▲ 天秤皿の極印
「極中堀甚九郎（花押）」

両替天秤

法量 最大高 70.8 cm / 最大幅 73.3 cm / 最大奥行 26.3 cm
 秤架高 45.8 cm / 秤架幅 57.5 cm
 棹 33.8 cm / 皿径 14 cm
 付属 小槌・分銅 14 個
 状態 箱部分の引出 4 つ（上引出は内部破損）
 中引出の右金環欠損 側面の左金環欠損



▲ 分銅（貳拾両）
全面に後藤家の家紋が押される。繭を象った形で、銀行を示す地図記号のルーツ。

展示によせて

ふくがみばっこ

福神跋扈—木南家旧所蔵の引札から

引札とは、商店が宣伝用に配る一枚刷り広告のことで、「絵びら」と呼ばれる多色刷りの絵入りのものが多いのが特徴です。かつて水陸交通の要衝として栄えた枚方には、木南家旧蔵引札、宮田家旧蔵引札(現池田屋コレクション)と二つの大きな資料群が残され、明治・大正時代の貴重な引札を今に伝えています。

さて、大半の引札は、正月にサービスとして顧客に配られるため、正月の祝賀と商売繁盛の祈り

を込めた、めでたい図柄のものが好まれました。とりわけ、七福神の恵比寿、大黒天、弁財天、そして実在の人物をモデルとした福助は、福を呼び込む福神として、様々な趣向のもと登場します。

①の図は、明治16年(1883)に出版された月岡芳年の錦絵、「藤原保昌月下弄笛図」です。横笛の名手、藤原保昌に盗賊の袴垂保輔が襲いかかろうとするも、その気迫に押されて果たせず、逆に諭されたという、『今昔物語』に収録された説話をモチーフとした図です。一瞬の緊張感を見事に表現したこの作品は、高く評価され、この絵のイメージをもとに、名優・九代目市川團十郎主演の歌舞伎として上演されました。②の引札は、有名になった同図の構成を真似して描かれています。しかし、よく見ると……保昌の横笛は釣竿、袴垂の脇差は鯛……そう、恵比寿と大黒天のユニークな見立てです。

さらに、もう一題。③の引札ですが、恵比寿と大黒の御両人、縁起のよい伊勢の名所になりすましています。さて、何に見立てているのでしょうか。

福神がさまざまな役柄に扮し、跋扈跳梁する……魅力的な引札の世界です。



① 月岡芳年「藤原保昌月下弄笛図」 明治16年(1883)
(日本経済新聞社『最後の天才浮世絵師 月岡芳年展』図録 2001より)



② 引札(枚方市教育委員会所蔵) 明治31年(1898)



③ 引札(枚方市教育委員会所蔵) 明治時代

お知らせ

『引札展』のご案内

市立枚方宿鍵屋資料館では、2009年2月11日(水)から3月9日(月)まで「引札展」を開催いたします。昨年に引き続き、2回目となる今回の引札展では、旧木南家所蔵の引札(枚方市教育委員会所蔵)から、「引札暦」(カレンダー付広告)を中心に約30点を展示いたします。在りし日の枚方の繁栄をしのぶ、色鮮やかな商業広告の世界をお楽しみください。